

[要旨]

難しく危険なコミュニケーション ——ネパールのプロテスタントの間で観察された不信の言説——

丹羽 充

ネパールのプロテスタントの間では、コミュニケーションにおいて、お互いが不誠実である可能性を見出させる不信の言説が流通している。それは、お互いの発話や行為に対する解釈を方向付けたり提供したりするという意味で、コミュニケーションを文脈化している。本稿では、まず、不信の言説がこうした意味においてコミュニケーションの文脈として作用する様態を明らかにする。

また、不信の言説は、もう一つ異なった意味でもコミュニケーションを文脈化している。より厳密には、コミュニケーションを文脈化しているのは不信の言説そのものではなく、むしろ不信の言説が広く流通しているという事実の方である。この事実は、実際のコミュニケーションにおいて、自分の発話や行為が不信の言説に基づいて解釈されてしまう可能性を示唆している。それだけでなく、相手もまた、相手自身の発話や行為が不信の言説に基づいて解釈されてしまう可能性を考慮に入れていることをも示唆している。コミュニケーションに臨む際には、それらの可能性を引き受けねばならない。本稿の後半部では、不信の言説が通しているという事実が、このようにして再帰性を高め、その結果、コミュニケーションを難しく危険なものへと仕立て上げていく様態を描き出す。